

## ハイデルベルク信仰問答講解説教 26 「罪の洗い清め」(2012年2月26日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

わたしが清い水をお前たちの上に振りかけるとき、お前たちは清められる。わたしはお前たちを、すべての汚れとすべての偶像から清める。わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。わたしはお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える。また、わたしの霊をお前たちの中に置き、わたしの掟に従って歩ませ、わたしの裁きを守り行わせる。(エゼキエル36:25-27)

神は、わたしたちが行った義の業によってではなく、御自分の憐れみによって、わたしたちを救ってくださいました。この救いは、聖霊によって新しく生まれさせ、新たに造りかえる洗いを通して実現したのです。神は、わたしたちの救い主イエス・キリストを通して、この聖霊をわたしたちに豊かに注いでくださいました。こうしてわたしたちは、キリストの恵みによって義とされ、希望どおり永遠の命を受け継ぐ者とされたのです。(テトス3:5-7)

## 【説教】

ある先輩の牧師が、その自伝の中で金沢の教会で牧会をしていた時のことを書いています。金沢は仏教、特に浄土真宗が定着している土地です。その中で伝道することの困難さが記されています。ある町の有力者の娘さんが北陸学院に入り、その関係で教会の礼拝にも出席するようになった。「よくお父さんが教会に来ることを許してくれたね」と言うと、「牧師の話聞くのはためになるからいい。でも洗礼はためだ。深入りはするな」と言われたというのです。

「洗礼」は、深入りすること。その理解はある意味当たっています。洗礼とはキリストに入っていくことなのです。キリストの中に深入りする。それまでは興味本位だったかもしれません。それこそ何か自分のためになる話を聞きに教会に来ただけだったかもしれません。教会に来るきっかけはいろいろあるでしょう。讃美歌が好きだから。キリスト教に興味がある。聖書を読んでみたい。しかし、洗礼を受けるということは、もはやそういう次元ではなく、もっと深いところ、信仰の根幹に触れる部分に入るといえることなのです。

わたくしは高校2年生の時に洗礼を受けたのですが、洗礼を勧めてくださったカナダ人の宣教師は、「洗礼は入学式のようなもの」と盛んに言われていたことをよく憶えています。キリスト教についての知識、理解ができたから洗礼を受けるのではない。むしろ洗礼を受けてからだんだん見えてくる。分かるようになるというのです。分かるというのは、知識としてではなく、神さまの救いを実感すると言った方がよいでしょう。言わば、その入口が洗礼。そこから初めて信仰の領域なのです。神さまの恵みを体験する歩みが始まる。

ゆえに教会では洗礼を受けることを勧めます。もし洗礼を勧めない教会があるとしたらそれは教会ではありません。前回の説教でも触れましたが、これは主イエスが直接お命じになっておられることなのです。今日の信仰問答にも問71のところ、ここは洗礼の聖書の根拠を明らかにしている問答ですが、ここにマタイによる福音書の最後で、主イエスが弟子たちを伝道に派遣する時に洗礼を授けなさいと言われるのです。もちろんだからと言ってむやみやたらに洗礼を授けることはいたしません。その人に救いを求める気持ちがあり、礼拝に通い続けていることを認めるならば積極的に勧めましょう。

またわたしたち改革派の教会では小児洗礼を授けます。小児洗礼については次週の説教で扱うこととなりますから、今日はそれについては触れませんが、でも信仰者の家庭に生まれた子どもはすでに神さまの救いの契約の中にあることを教会は信じております。その子どもが選ぶより先に神さまがその子どもを選んでおられるのです。これは神さまの恵みがどれほど大きい表しています。そして幼子の時からこの救いの約束の中で育てられることがその子どものみならず、親や教会にとってもど

れほどの慰めと安心になるか。それは洗礼の意味を知れば知るほどよく分かることだと思うのです。

この機会に、わたくしはあえて皆さんに申します。また信仰を求めて教会に来ている方々にはつきり申します。どうかキリストに深入りしていただきたい。いや、深入りしなければ意味がないのです。ただ上っ面だけではなく、雰囲気とか、気分の問題ではなく、その存在のすべてがキリストの中に溶け込んでいくようなものになっていただきたい。そうでなければわたしたちは本当の意味で救われることにならないからです。

そこで、今日の間答に注目しましょう。問69、70を続けて読みます。まず69の問いの部分で「十字架上でキリストの唯一の犠牲があなたの益になることを、どのように思い起こした確信させられるのですか」と問うています。前回の説教で問66に、礼典とは「神によって制定された目に見える聖なるしるしを施す」とあります。この洗礼という目に見えるしるしを見るとわたしたちは思い起こすというのです。十字架のキリストの犠牲がわたしの益になっている。二千年前の十字架の出来事が今のわたしと関わりがあるのです。どういう関わりかという、問69の答えでは「魂の汚れ、すなわちわたしのすべての罪を、この方の血と霊とによって確実に洗っていただけ、ということ」それは問70にあるように「わたしたちのために流されたキリストの血のゆえに、恵みによって、神から罪の赦しを得る、ということ」に他なりません。それは罪の解決であります。キリストによって、その犠牲によって、わたしたちは御前に罪赦され、もう罪の問題が解決したことを知る。思い起こすのです。

罪の問題について、わたしたちはどのように考えているでしょうか。これは教会がまず自ら反省しなければならぬのですが、この罪を積極的に語らなくなってきたということがあります。むしろこの罪に覆いをかけ、目をそらして、罪の問題をおとぎ話、神話のように捉えてしまったのです。具体的には、創世記第3章にある墮罪物語を否定して、罪を神さまとの関係の問題ではなく、単に社会の問題、倫理の問題にすり替えてしまうのです。ですから教会の語る説教も、もう少しまじな生き方をしよう。そうすれば自分も周りの人も皆ハッピーになれる。その程度のものにしかならなくなったのです。

それは人間の罪の問題を人間の内面的問題というよりも、それを取り巻く社会や環境の問題、教育の問題のせいにしてしまっていることでもあります。社会が悪いから、経済が悪いから、そういう歪みが人に罪を犯させるのだ。あるいは学校できちんと倫理、道徳を教えないから罪を犯すのだ。でもこれは教育の問題でしょうか。日本社会における教育は開国して以来、この150年余りの間に飛躍的に良くなりました。これは特に宣教師たちが始めたミッションスクールの影響が大きいのです。そ

の結果男女問わずすべての子どもたちが良質な教育を受ける権利を得ました。しかしそれだからといって人間の状態が以前より良くなったと言えるか。その間にもこの国は大きな戦争を繰り返しました。他にも差別、虐待、世の中の問題は後を絶ちません。現代社会でも高度な教育を受けた者たちがその知識をもって巧妙な犯罪を犯すのです。そして世の中はそういう罪を「魔が差した」「判断を誤った」という言葉で片付けてしまう。それは魔が差したのであって、本当はよい人間なのだ、と。それは罪から逃げている。罪と真正面から向かい合っていないということです。

現代人の最大の問題は、罪を認めず、自分たちに問題はないと考えていることです。あの『ナルニア国物語』を書いた C.S. ルイスは、わたしたちが本当に惨めな罪人であるという動かぬ証拠は、自分たちがそのような者であると思っていないところにあると言っています。ある人がこのような譬えをしています。超高層ビルの屋上でパーティーを開き浮かれ騒いでいる人たちが、そのビルの地下で火災が起きていることに気付かない。それは本当に惨めです。でもわたしたちはまさにその状態なのです。自分の足下に、いや自分自身に火種があるのに、そのことに気付かずに、自分には問題がないと思っている。それよりも周りに問題があるとしている。それこそが最も惨めなことではないでしょうか。

何よりも、洗礼は自分自身の中にある罪と真正面から向かい合うことであります。信仰問答では「魂の汚れ」とあります。「魂」というのは、人間存在そのもの、その一番の中心ということです。そこから汚れている。社会が悪い、周りのせいにする以前に、この社会を構成している人間そのものが汚れていることに目を留めなくては行けないのです。社会がよくなれば人間もよくなる。こんな単純なものではありません。これは自分ではどうすることもできない。ちょっと考え方を修正するとか、訓練をすれば治るということではない。その根本が汚れてしまっている。ですからこの信仰問答では、何よりもまず「人間の悲惨さについて」、その罪の現実、惨めさを見つめました。「わたしは神と自分の隣人を憎む方へと生まれつき心が傾いている」(問5)「どのような善に対しても全く無能であらゆる悪に傾いているというほどにわたしたちは墮落している」(問8) それは神さまに洗っていただくしかない。人間自ら解決できる問題ではないのです。ですから問8ではこう言います。「神さまの霊によって再生されないかぎり」と。もはやこの問題はわたしたちの手を離れています。

それゆえに神さまの救いの御業が行われました。御子イエス・キリストを与えて、この罪を洗い清めてくださった。それは神さまでなければ解決できないことを示しています。テトスの手紙に「この救いは、聖霊によって新しく生まれさせ、新たに造りかえる洗いを通して実現したのです」(3:5)とあります。キリストの十字架と復活の御業しか、わたしたち人間をその根本から洗い清め、新しくするものではありません。信仰問答では、問69で「この方の血と霊とによって確実に洗っていただけ」とあります。「血」は十字架の犠牲による罪のあがない、「霊」は神さまが命の息を吹き入れて人間を創造されたように、ここに新しい創造が起こるということです。キリストの血と霊によって、わたしたちは罪を赦され、新しく造りかえられる。そこに新しい人間、罪から救われた人間の出発があります。キリストの出来事がそれを可能にしました。洗礼はそのキリストの御業を示して、そこにわたしたちをつなげるものです。

気をつけなければならないのは、洗礼そのものにこの効力があるということではない。あくまでも救いはキリストの御業にあります。このことは次週の間答でも詳しく触れることとなりますが、今日のところでも、問69に「思い起こす」という言葉があります。洗礼はその救いをそこに新たに起こすものではありません。洗礼はあくまでもしるしです。そのキリストの救いの出来事を指し示す手段です。でもそこでわたしたちは鮮やかに思い起こすのです。キリストの出来事によってわたしの罪

の問題が解決したということ。そこで起こった決定的な事実気付かされる。それはわたしの中で立ち上がり、わたしをいよいよキリストの命に駆り立てるでしょう。そこから問70にあるように「次第次第に罪に死に、いっそう敬虔で潔白な生涯を歩む」聖化の歩みが起こされるのです。キリストはわたしたちを洗礼に招いておられます。ぜひこのキリストの中へ飛び込んでください。深入りしてください。もう周りのせいにすることも、あきらめることもない。ここに人間が根本から健やかにされ、神さまに祝福されて生きる道が備えられているのです。祈りをささげます。